

直言

国連安保理決議の期限一月十五日発売の「タイム」誌(二月二十一日号)は、「Deadline of War」と題した湾岸危機全面特集のカバー・ストーリーで、「戦争が始まれば、それは偶発ではないので、双方は十分な準備のもとに戦うだろう」と述べていた。こうした展望のもとで、イラク側は防衛戦、イスラエル攻撃・サウジアラビア石油施設攻撃・テロリズムを含む攻撃戦という戦略を段階的に拡大するであろうことを、チャートでも示していた。

一月十七日午前三時(現地時間)を期して断行された多国籍軍の緒戦における大量空爆の一方的な猛攻は、「タイム」の見通しが誤りであるかのように一時思われたが、その後の戦局はその見通しの正しさを証明しており、今や戦争の長期化が懸念されるに至っている。それにしても、時々刻々、戦争が拡大している現時点で、この戦争の根源について疑義を呈することなど、無意味かつ不必要に思わ

湾岸戦争への“深い疑問”

れるかもしれないが、戦争の悲劇がしばしば、周到な計画を狂わせる誤算の累積によることを想うとき、私は、今回の湾岸戦争への素朴な、かつ深い疑問を語らずにはいられない。

それは、クウェート自身の問題であり、またアメリカの中東政策そのものについてでもある。言うまでもなく、イラクのクウェート侵略は国際法上も許されない暴挙であったが、そのような牙をむき出していたサダム・フセインの野望を容易に許してしまったクウェートに、そもそも問題があったのではないか。クウェートは、軍事的にも外交的にも、イラクの侵略を防ぐ努力を怠ってきたからこそ、このような暴挙を許したのであり、なぜクウェートは、アメリカや西側諸国と事前に安



東京外国語大学教授
中嶋 嶺雄

全保障体制を組むなり、逆に外交上は、一時的にせよ対イラク柔軟対応戦略ないしは面従腹背の外交策を講ずるなりして、真剣に自己防衛をはからなかったのか。いずれにせよ、イラクとクウェートの紛争は、石油問題・領土問題を含めて、基本的にアラブ内部の地域紛争だったはずである。

だとすれば、いかに国連決議があったにせよ、イランのホメイニ革命で手を焼いたアメリカがイラン・イラク戦争ではイラク側の軍備強化に肩入れしてきたのに、今度は飼い犬に手をかまれたことに猛反発し、自らの防衛努力を怠ってきた、全世界を巻き込んで守るに値するか否かの疑わしいクウェートに与して、今回のような全面攻撃に出たのは、いかにアメリカ的正義や新しい世界秩序のためとはいえ、やはり問題が残ると言わざるを得ない。この戦争の代価は、とめどもなく大きなものになりそうである。